

扁桃炎

「たかが扁桃炎、されど扁桃炎」
口の開きが悪くなったら早めの受診を

解説します



あいの里耳鼻咽喉科
院長
森合 重誉氏

先生のプロフィールは
P40へ

体力や免疫機能の低下で
細菌感染に移行すると病状が
悪化する場合も

扁桃炎とは、口蓋垂（こうがいすい）、いわゆる「のどちんこ」の両脇にある扁桃（口蓋扁桃）というリンパ組織、一般的に扁桃腺と呼ばれる部分がウイルスや細菌などの感染によって炎症を起こした状態です。

主な原因は、上気道炎、いわゆる風邪から引き続いて起こることが多く、ウイルス感染であれば、自分の体力や免疫機能で打ち勝ち、気付かないうちに治っている場合も多いと思います。しかし、体力や免疫機能

が落ちているときに細菌感染に移行し、病状をこじらせてしまうことが多々あるのです。すると高熱が出たり、食事も取れないほどの痛みが出る方もいます。細菌感染の場合は、自然に治ることは少なく、医療機関を受診する必要があります。
**扁桃周囲炎は抗生剤治療が必要
悪化を防ぐためにも早期の治療を**
治療は、3〜5日間の抗生剤の内服投与で普通は治ります。しかし細菌の種類や、細菌の量が多いと、扁桃の領域を越えて、扁桃の後方の領域にまで炎症が及ぶことがあり、これを扁桃周囲炎と言います。口を開

ける筋肉に炎症が起き、口が開きづらくなってしまうのです。
さらに悪化が進むと、扁桃周囲膿瘍という、膿のプールができてしまうような状態になってしまいます。
そうなる前、抗生剤のみでの治療は難しくなり、先生によって方法は異なりますが、膿のプールに針を刺して膿を抜くか、切開をして膿を出すか、病院によっては直ちに手術で扁桃を切除してしまう場合もあります。
なお、1年に4回以上、扁桃炎を繰り返し起こす方は、習慣性扁桃炎として手術適応となります。扁桃炎を繰り返し起こすことで、学校や仕事を休まなければならなくなるなど、社会生活上の問題や医療経済的な理由から、根治を目的として、扁桃炎が落ち着いた状態のときに手術を受けるよう勧めることがあります。
扁桃炎は、一般的によくある病態で、いつの間にか治ってしまう場合もあるため、あまり深刻に捉えていない方が多いと思いますが、耳鼻咽喉科医の立場で言うと、あまり疎かにはできず、実は怖いこともあることを知ってほしいと思います。
例えば、扁桃周囲膿瘍が舌骨（喉仏とも呼ばれる甲状軟骨の上部）にまで達すると深頸部膿瘍や縦隔膿瘍と言って、一気に胸の方にまで広がってしまうことがあるからです。決して多くはありませんが、その場合には、全身麻酔下で頸部皮膚を切開

する手術が必要となり、私も何例か経験しています。
**あまり痛みを来さない病巣性扁桃炎
腎臓などの他臓器疾患の原因にも**
特に男性は我慢してなかなか受診されない方が多いのですが、口の開きが悪くなった場合は、少なくとも扁桃周囲炎を起こしており、抗生剤治療が必要ですので、さらに悪化させないためにも、早めに耳鼻咽喉科を受診することをお勧めします。
さらに、扁桃炎の中には、あまり強い喉の痛みを来さない病巣性扁桃炎と呼ばれるものがあります。扁桃で炎症が起きると、扁桃から離れた場所に症状が出る病気で、腎臓や皮膚などに起きてしまうことがあるのです。いずれも扁桃摘出術とステロイドバルス療法で寛解が得られます。例えば皮膚科医の間では意見が分かれています。の掌蹠膿疱症や、放置すると将来的に腎臓の機能が低下し、透析になる可能性のある慢性糸球体腎炎（IgA腎症）などが挙げられますが、一般的にあまり知られていません。このように原因が分からずに長年悩んでいる症状の中に、実は扁桃が原因であるということもあります。扁桃炎はよく聞く病気の一つではありますが、「たかが扁桃炎、されど扁桃炎」と捉えて、気になる症状は、我慢せず、耳鼻咽喉科に相談した方が良いでしょう。